

トピックス

平成22年度特別展「立原杏所とその師友」を開催しました

江戸時代の後期、関東の南画は江戸を中心に独自の発展をしましたが、水戸藩士の立原杏所（1785～1840）もその一翼を担った一人です。立原杏所の作品を中心に、彼と関わりをもった林十江（はやし じっこう）、谷文晁（たに ぶんちょう）、渡辺華山（わたなべ かざん）らの作品や史資料を交えて、水戸と関東の南画の世界を紹介しました。鴛鴦（おしどり）をはじめとする鳥や草花、袋田の滝、筑波山、富士山といった茨城県内外の景色など、様々な題材の絵を味わうとともに、作者の筆づかいや色づかいなども堪能できます。

来館者からは「立原杏所や谷文晁の作品を楽しみに見に来ました。藍を使った作品が気に入りました」という感想もありました。

1 開催の趣旨

江戸時代も半ばを過ぎた18世紀の後半、上方で盛んとなった南画が関東にも広まりました。江戸はその一大拠点でしたが、水戸藩士の立原杏所（たちらは・きょうしょ）も関東南画壇の一翼を担った一人です。

彰考館総裁立原翠軒（たちらは・すいけん）の子として水戸に生まれた杏所は、父の元に出入りしていた林十江（はやし・じっこう）や、下野黒羽の小泉斐（こいずみ・あやる）らに画を習い、やがて十江とともに「水戸の南画」を代表する画家へと成長しました。杏所は20代の末に江戸・小石川の水戸藩邸勤務となり、この地で他の南画家や文人と交流をするようになります。藩主の信任も厚く、武士としての忠勤に励みつつ学画に精進し、一家を成しました。また、書や篆刻、鑑識などにも優れ、いわゆる「文人」の一人としても活躍をしました。

本展では、杏所の生涯にかかわった人々の資料を交えつつ、没後170年にあたる平成22年に「南画家」そして武士の「文人」立原杏所の世界を作品と史資料で紹介します。

- | | |
|-------|--|
| 3 主 催 | 茨城県立歴史館 |
| 4 協 賛 | 株式会社常陽銀行、茨城県信用組合 |
| 5 後 援 | NHK水戸放送局、JR東日本水戸支社、水戸市、(社)水戸観光協会、(一社)茨城県観光物産協会、大好き いばらき 県民会議 |
| 6 会 期 | 平成22年10月9日（土）～11月23日（火）
開催日数 40日
休 館 日 月曜日(祝日の場合はその翌日)、11/22(月)は臨時開館 |

7 関連行事

(1) 講演会

平成22年10月24日(日) 午後1時30分から

講師 小川 知二 氏 (美術史家 元東京学芸大学教授)

(2) 展示解説とミニ講座

平成22年10月23日(土), 10月31日(日), 11月7日(日)

いずれも, 1日2回, 午前11時から, 午後2時から (各60分程度)

8 展示内容

第1部 翠軒, 十江そして杏所へ

- (1) 父立原翠軒
- (2) 最初の師林十江
- (3) 下野黒羽の小泉斐

第2部 謹厳なる文人杏所の世界

- (1) 漢画・古画より学ぶ世界
- (2) 真景と肖像・人物
- (3) 山水の妙, 花鳥の彩り

第3部 文晁と門下四哲とその交流

- (1) 江戸の巨人谷文晁
- (2) 心の友渡辺崋山
- (3) 山水花鳥の名手 椿椿山と高久靄厓
- (4) 継承者 春沙と朴二郎



重要文化財の「葡萄図」(右端・東京国立博物館蔵)



重要美術品「芦石鴛鴦図」(出光美術館蔵)